

特254

137

北村庸三著

國民同盟の正體曝露

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5

始



特 254
137

自序

予は大正十三年早稲田大學を出て、今は縣會議員と爲りて田舎政治家の群に加つて居る。田舎から中央政界の有様を眺むると癩の種ならざるものはない。就中近頃陰謀政治家や變節議員等が集りて國民同盟と稱する政治團體を作り、己れの醜態は棚に上げて自ら正義呼ばりを爲し民を欺かんがために愚にもつかぬ宣傳や駄法螺演説を吹き廻つて居るを見ては、最早捨て置く譯には行かぬ。田舎者を馬鹿にするなど言ふてやりたくなる。今日の國民がこんな者等に誤魔化されて浮か／＼として居るようなことでは、立憲政治も何にもあつたものではない。



内外の時局極めて重大なる時に當り、國民は舉つて眞劍なれよ。殊に國を脊負ふて起つ所の政治家は一層眞劍なれよ。同時に國民を欺き政界を腐らす蛆蟲のような物は悉く之れを焼き拂ふて其の上に鹽を撒け。然る後に政界も淨化せらるべく、然る後に國民も懸命に出動せん。予は此の心を以て筆を執るのである。

昭和七年十二月

著者識す

目次

一 似而非なる政治團體……………	一
二 民政黨總裁乗取運動の開始……………	四
三 濱口内閣辭職と若槻内閣成立……………	一五
四 協力内閣の論擡頭……………	一八
五 若槻内閣辭職の真相……………	二七
六 犬養内閣成立と安達氏の脱黨……………	三三
七 協力内閣論批評……………	三二
八 安達復黨運動の経過と結果……………	四〇
九 親分乾兒論……………	四七
一〇 國民同盟の解消……………	五〇

國民同盟の正體曝露

北村庸三著

一 似而非なる政治團體

本年六月頃より政界の一角に、國民同盟と稱する少數者の似而非なる政治團體が現はれて、近く結黨式を擧げるなぞと頻りに吹聴して居るが、結黨式を擧ぐると擧げないとに拘はらず、斯る團體は遠からずして自然消滅に歸することは疑ない。それは兎も角として、一體此の團體に加入せる連中は如何なる種類の人々であるかを見ると、昨年十二月民政黨内

閣を、政治家として最も恥づべき抱合心中に依りて倒壊し、党内の叛逆者として除名せられんとして脱黨したる安達謙藏氏を筆頭として、之に續いて民政黨を離れ、又は除名せられたる二十幾名の代議士の外に、是まで政黨に加入する機會を得ずして、一人一黨とか稱して威張つて來たが、最早やり切れなくなつて渡りに舟を見付けたる數名の代議士を合せ、都合三十餘名を以て成立つて居る。

斯くの如き奇怪なる經歷の持主等が、天下に向つて何を言うて居るかを見ると、從來とても是等の人々と同じく政黨に容れられずして、政界に彷徨して居た連中が屢々繰返したる如く、既成政黨には弊害がある。新時代の要求に應ずることが出來ないから、我々が率先して強力なる新政黨を樹立し、是に於て政界を淨化し、新日本の更生に向つて努力邁進す

るのであるなぞと狂氣じみたる駄法螺を吹き廻り、甚しきに至りては、陸軍の主腦部は我々の運動に共鳴して裏面では固く手を握り、又宇垣大將とも完全なる諒解が付いて、一臂の援助を吝まずと明言されて居る。而して九月には齋藤内閣は倒れて平沼内閣が起り、安達氏が再び内務大臣の要職に就くことは萬々疑ない。其時に至らば民政黨は土崩瓦解するから、我々は一步先んじて民政黨を脱し、國民同盟に参加するのであると、脱黨連中が千遍一律に自己の醜態を包み隠して、左も眞實しやかに中央政界の實情に迂遠なる田舎の後援者を説廻り、變節の承認を哀願して居た所が、九月になつても齋藤内閣は倒れないから、今度は手を變へて平沼内閣を見限り、内田外相は安達氏と同縣の出身であるから兩者の間に提携が出來た、次は内田内閣で、其中堅は國民同盟より外には無

いなぞと吹き廻つて居る。其の馬鹿さ加減は逆もお話にならないが、併し是は事實であるから驚くではないか。陸軍部内にも時々此の情報が入るものと見えて、主脳部は怒るまいことか、斯くの如きは軍部を利用する虚偽の宣傳であつて、實に皇軍を潰すものであるから、今後は彼等の仲間には一切面會を謝絶すると憤慨し、宇垣大將も、全く知らぬ間に自分を利用するに至つては、頗る迷惑千萬であると嘆聲を漏らされて居る。今日昭和の御代に於て斯くの如き妖怪變訝に近き政治團體が現はれたのは、抑も如何なる原因から來たのであるか、極めて率直に其の真相を暴露して世の注意を求むるのが記者の目的である。

一 民政黨總裁乘取運動の開始

一昨年十一月十四日、民政黨の總裁であり、且つ民政黨内閣の總理大臣として一世の輿望を集めたる濱口雄幸氏が、岡山縣下の大演習に向つて出發せんとするに方り、東京驛頭に於て一兇漢の爲めに狙撃せられ上下を震動せしめたることは、想ひ起すさへ残念至極であるが、當時大演習に出張中であつた安達内務大臣は、此報を手取るや恐多くも御警衛の大任を打棄て、倉皇として歸京したる時は、既に幣原外相が勅命に依り臨時首相の印綬を帯びたる後であつた。安達氏は之を知りて心底に如何なる考を起したるかは茲に明言する限りではないが、此時より黨内に於ける安達腹心の者等は、幣原外相の臨時首相兼任に向つて實に聞くに堪へざる惡聲を放ち始めた。曰く政黨内閣の時代に於て、政黨員に非ざる者をして臨時首相を兼ねしむるは政黨内閣の本旨に背反する、宜し

く政黨に功勞あり、生粹の黨員である安達内相をして之に代らしむべし。曰く民政黨内閣が幣原臨時首相を戴くは、民政黨をして三菱の奴隸と爲すものである。曰く幣原男は、嘗て予は政黨に加入する程墮落せずと放言せる程、それだけ政黨嫌ひである、斯くの如き人物を政黨内閣の閣僚たらしむることが既に變態であるに拘はらず、其上之を首相代理と做すとは抑も何事であるか。曰く彼れは全然政黨内閣を統率する能力なき一種のロボットに過ぎず、其他有りと有ゆる惡聲を放つて幣原男を攻撃し、甚しきに至りては反對黨と通謀して黨の内外を攪亂して、一日も速に幣原男をして首相代理の地位より退かしめんと、どれだけ陰謀と奸策を運らしたか分らない。併し斯くの如き陰謀が成功すべき理由は無い、幣原男に臨時首相代理の勅命が降下したのは、男が閣僚の首席であるといふ、

従來の慣例に基づきたる當然の順序であるのみならず、政黨内閣であるからと云うて、此の順序を變更すべき理由は無い。元來政黨内閣といふことは、國法や官制とは何等の交渉なき政治上の名稱であるから、政黨内閣であるからと云うて、官制上の適用を二三にせねばならぬといふが如き理窟の生ずべき譯はないが、今日の政黨員には、此位の理窟をも解しない者が物識り顔をして威張つて居る、以て政治家の無智無識を知るべきである。

安達一派の行動に糸を引く者が誰れであるかは言はずして推測が出来ぬ。此の有様を見て眉を顰めたる者は、黨内の穩健分子ばかりではなく、一般世人も亦不快を感じたらしく、之が安達氏を傷つけたること幾何なるか知れない。それであるから眞に氏の爲めに計り、黨の平和を庶幾ふ

者は、斯る運動を止めさすべく氏に向つて屢々忠告をした。斯くの如き行動は氏に對する黨内外の同情を失はしむるのみならず、却て益々反感を昂め、所謂最良の引倒しとなるから、斷然之を止めさすべく忠告をしたけれども、氏は中々之を肯入れない。彼等の行動は彼等の勝手であつて我輩の關する所ではない。彼等には彼等の理想があるに相違ない、理想のある者は理想に向つて自由に進むがよい、我輩が之を止める權利は無いと飽くまでも知らぬ顔をして押通して來た。之が氏獨得の陰險なる戦法であつて、此の戦法は是から先きにも屢々露はれて出るから記憶して置いて貰ひたい。

安達一派は次の議會までには是が非でも幣原臨時首相を罷めさして、安達氏をして之に代らしむべく有ゆる策動をしたが其功を奏しない、奏し

ないのは當然である。苟も勅命に依りて臨時首相の大任に膺りたる者が、斯くの如き陰謀に依りて其の地位を去るが如きは、夢にも想像してはならない事である。彼等は益々焦り出したが、幣原男が自發的に罷めない限りは如何とも施すべき術が無い。其中に第五十九議會は開れた、幣原臨時首相に何か失策あれかしと心から祈つて居たであらうが、圖らずも衆議院豫算委員會に於て彼の失言問題が突發した。失言問題と云ふが實は失言でも何でも無い、當然過ぎる程當然の言論であるが、政權に餒えたる政友會の餓鬼共は、恰も昔東海道の雲助が言掛りを拵へて旅人より酒代を強請したると同じく、之を捉へて喧々、罵々、暴行、脅迫、數日間、に亘り委員會を躡蹠して擾亂の修羅場と化した。斯くの如き不逞の暴漢が、假令一人たりとも代議士として帝國議會の席を汚す間は、日本國

民は立憲政治を口にする資格は無い。然も此の有様を見て手を拍つて快哉を叫んだ者は政友會ばかりでなく、寧ろ彼等以上に歡んだ者は疑もなく党内の安達一派であつたと同時に、彼等の背後には更に一段の凄味を以て、いやらしき笑を漏した怪物が潜んで居たことは争はれない事實である。

濱口總裁の健康回復は、全國數百萬の黨員が心の底から神に願を掛けたのみならず、一般民衆も此の有爲なる政治家が、再び政治界の表面に活動する時機の一日も速かならんことを熱望しない者は無かつた。之と同時に萬が一にも總裁の健康が豫期の如く回復せられざるときは、次の總裁は何人に落ちるのであるか、政界の視線は此の方面にも向けられたが、此の雰圍氣の裡より漸次に擡頭したる者は別人に非ずして幣原男其

人であつた。固より氏自身に於ては、毛頭斯くの如き野心は無いのみならず、假令時機熟して黨員舉つて氏を推すことありとするも、恐らくは之を承諾せらるゝことは無かつたに相違ない。併し此の空氣が如何に安達一派の神經を悩ましたかは、彼等が後任總裁幣原男の名を聞くに氣が氣でなく、何とかして氏を傷つけ、之を葬り去らんと心に期して居た際、偶々議會に於て失言問題が起り、是に依りて氏に對する總裁の噂も自然に消失せることゝなつたから、彼等は先づくと安心と胸を撫下して居た所が、一難去つて復た一難、豈に圖らんや更に一人の強敵が現はれて來た。其の強敵とは誰れであるか、時の大藏大臣井上準之助氏である。井上氏は民政黨員としては日尙ほ淺いが、財界に於ける勢力は、澁澤榮一子逝いて後は恐らくは氏の右に出づる者なく、第二次民政党内閣の

大藏大臣としては、短命にして政治的手腕は未知數に了つたが、濱口内閣の組織せらるゝに方り、再び出て、大藏大臣の職に就くと同時に、將來政黨政治家として世に立つ決心を以て民政黨に入黨するに至つた。黨員は此の有力なる人物を得たるを非常に歡ぶの傍ら、氏の政治的手腕に至りては、一片疑懼の念を懷く者も無いではなかつた。然る所一たび大藏大臣の地位に就くや、濱口内閣の財政政策を一身に引受け、敢然として金解禁を斷行し、緊縮政策を徹底して少しも惧るゝ所なく、殊に第十九議會に臨みては、反對黨の猛襲を片端から撃退して尙ほ綽々たる餘裕を示し、頭腦は明晰にして辯力は雄に、然も其の奮闘力の旺盛なることは全く豫想外であつて、流石の政友會議員をして、井上藏相に掛つては堪らないと嘆聲を發せしむるに至らしめた。實に第五十九議會は全く

井上藏相の獨舞臺であつたのであるが、是より氏に對する黨員の信望は彌々厚くなつて、將來民政黨を脊負うて立つ者は氏を外にしては他に求むる者なく、新總裁井上といふ空氣が漸次黨内を掩ふやうになつて來た。此の有様を見た安達一派は、争てか指を咬へて自然の潮流に盲從するこゝとが出来やうか。俄然として彼等は嚮に幣原男に加へたると同じく、今度は更に井上氏に對して鋒を向け、與黨でありながら、公々然と井上藏相の財政政策攻撃を始め、黨内を攪亂して極力氏を傷つけ、氏を陥るべく狂犬の如くに吠え廻つた、彼等一派も亦多忙なる哉である。

第五十九議會は未曾有の擾亂を極め、遺憾なく議院の醜態を暴露した。近頃一部國民の間に萌したる議會否認といふが如き不吉なる思想は、主として此時に胚胎せるものであることは疑ない。併し結局は落着く所に

落着いて、無事に閉會するに至つたのは當然の成行である。此間濱口首相が瀕死の病驅を押して登院せられた悲壯の有様は、之を目撃せる者の終生忘るゝ能はざる斷腸の思であつたが、議會閉會するや、間もなく第二の大手術を受くべく再び帝大病院に入れられたるに至りては、之を筆にするさへ涙の種である。四月の初に至りて施術後の経過は思はしからず、愈々濱口首相は意を決して首相及び總裁を辭せらるゝと同時に、内閣總辭職の餘儀なき場合に立至り、後任總裁問題と擲んで、党内も政界も大動搖を始むるに至つた。事此に至りては最早一派の策動のみに委して置くことは出来ぬ、隠れる蔭武者も愈々表面に現はれ、公々然と活動を始めたとは言ひ兼ねるが、少くも自ら采配を揮つて郎黨を指揮し、成功の望みなき野心の遂行に全力を注ぎたることは笑止千萬の至りである。

三 濱口内閣辭職と若槻内閣成立

風雲急を告ぐる同月の七日若槻氏は伊東の別荘より歸京せられ、党内外の大勢は同氏に傾いた。此の場合氏を推立て、後任總裁とするに非ざれば大命降下は望むべからず、安達氏の如きは問題にならない。智慧の持主と云はれた江木氏は此の形勢を看取つて安達氏を誘ひ出し、手を携へて若槻氏を訪問し、内外の大勢を述べて極力氏の奮起を懇請し、之に引摺られて安達氏も表向の誠心誠意を披瀝して同様の事を繰返した。が凡そ世の中には程滑稽な喜劇は無い。豫期の如く若槻氏は固辭せられた。安達氏は我が事成れりと欣び勇んで歸つたが、焉ぞ知らん其時には既に氏の胸には三寸の釘が打込まれて、身動きもならぬことになつたこ

とに氣が付かない。形勢は愈々切迫して十日には内閣總辭職を執行すると同時に、閣僚及び幹部は若槻氏を後任總裁に推薦し、安達氏も之に異議を唱へることは出来ない。安達一派は周章狼狽し、反對の決議などをして悶き出したけれども、益々其の醜態を暴露するのみであつて對手にする者が無い。翌十一日若槻氏は濱口氏を大學病院の病床に訪問せられたが濱口氏は見ても痛はしき病驅を起して國家及び黨の將來を述べ、涙を浮べて若槻氏の奮起を促した。氏の心は動かざるを得ない。事此に至りては一身の事情なぞは顧みるべき秋でない、續いて黨の長老たる山本男の邸に向はれたが、其後の事は述ぶるの要は無い、氏は愈々最後の決心を固めらるゝに至つた。此間安達氏は何所に在りて何をして居たかと云へば、官邸の大臣室に籠居して一切他人の面會を謝絶し、身邊二三の

者より時々刻々若槻氏の動き方を聞取り、氏が濱口氏を訪問せりとの情報を知り、或は衷心平かならざるものゝ如く、山本男の邸に向はれたりとの情報を聞くや益々落付を失ひ、最後に若槻氏が愈々總裁を受諾せりとの報を聞くや、顔色蒼白土の如く、持前の苦笑を浮べ、悄然として家に歸られたといふことである。

四月十四日豫想の如く若槻總裁に大命降下し、即日二名の閣僚を更迭して若槻内閣の成立を見るに至り、是に依りて政局は漸やく安定したが安定しないのは經濟問題である。九月に入りて豫算編成期が近づいた。赤字問題に關聯して非募債主義を緩和し、公債發行と増稅計畫を立てねばならぬ。其上意外にも滿洲問題が勃發して、政府は言ふに及ばず、國民も非常なる緊張味を帯びて來た。井上藏相と幣原外相は若槻内閣の中

堅となつて必死の努力を傾倒すると共に、黨員の此の兩相に信頼するの念は倍々厚くなり、此勢にて進まば兩相に對する黨の信頼は彌々昂まりて、次に來るべき總裁問題は何れに飛ぶか分らない、安達一派は此の情勢を見て躍起となるのは無理もない。俄然外交と財政の攻撃を始めて兩相を傷つけ、黨内の攪亂に取掛つた、けれども黨の大勢は動かない。毒を飲まば皿までだ、此の時より或は軍部の門を叩き、或は敵黨と通謀し甚しきに至りては弗買財閥と結托し、内外相策動して若槻内閣倒壞の陰謀を企てたのが、協力内閣運動の真相である。

四 協力内閣論の擡頭

協力内閣運動の頭目は言ふまでもなく安達氏である。氏は何を目的に

斯くの如き運動を起したのであるか。氏は先頃國民同盟の宣傳隊を率ゐて九州に下り、到る處に於て協力内閣運動の經過を述べ、之を土地の新聞に掲載せしめて得意がつて居るやうであるが、今日此頃こんな古臭き物語を繰返して、自己辯護を爲さねばならぬ悲哀を感じないであらうか。氏の言ふ所に依れば、氏が協力内閣を考へ出したのは次の三つの原因から來て居るさうである。第一は滿洲問題であり、第二は思想問題であり、第三は政治、財政、經濟問題である、我國は是等の問題の爲めに内憂外患一時に押寄せて所謂時局重大である。此秋に方りて如何に衆議院に多數を制する政黨内閣と雖も、一黨の力を以て此の國難を脊負うて來るべき議會を切抜けることは至難である。強て押通さうとすれば血を見ることは明かであるから、此際民政黨も政友會も從來の行懸りや感情を一切

水に流して同心協力して國家の爲めに奉公すべきである。之が協力内閣論の要旨である。而して其の方法としては、先づ以て若槻内閣は總辭職をする、内閣が辭職すれば大命は第二黨たる政友會總裁犬養氏に下ることとは疑ない、新内閣は政民兩黨より各々相當の閣僚と政務官を入れる。民政黨よりは安達内務大臣の居据りは無論のこと、其他に安達一派の某某等數名は新たに入りて閣僚に加はる事に筋書が出来たから、其の閣僚候補者等は欣喜雀躍手の舞ひ足の踊るも覺えず、晝夜兼行一生懸命に運動を始めた。殊に最も面白きは、犬養首相の下に安達内務大臣を据置くことである。元來犬養氏は安達氏を政治家として取扱つて居らない、安達といふ漢は學問をしたことのない奴であるから、彼れの頭に國家に對する經綸などは藥にしたくとも無い、彼れは政黨の事務長以上の人間で

ないと、幾度彼れが得意の毒舌を吐いたか分らない。其の犬養首相の下に安達氏が内務大臣の椅子を占めんとする、是が所謂自己陶醉といふものである。更に立入つて安達氏の心中を解剖すれば、次の如きものがある。若槻内閣が辭職すれば、氏は當然責任を負うて總裁を辭するに相違ない、次の總裁は無論我輩である。我輩が第一黨たる民政黨の總裁として内務大臣の要職に在る以上は、新内閣の中堅は我輩であるから、内閣を活かすも倒すも我輩の胸にある。何の途、寄木内閣なぞは永く續くものでないから、潮時を見計つて内より一撃を加へて之を倒さば、次に來るものは安達内閣より外に無い。夢か何か知らないが斯くの如き野心を懷きながら、一方には腹心の者等を指揮して黨内の大勢を導かんとし、他方には黨幹部と協力内閣の交渉を爲さしむる等、彼れや是れやの作戦

を残して、十一月八日熊本縣下の大演習に向つて出發した。

大演習に赴むく車中談として、協力内閣論の片鱗が新聞に現はれたが是から問題は愈々表面化して政界は大分やかましくなり出したが、安達一派は電話や電信を以て時々刻々東京の情報を出張中の親分に通じた。親分は愈々得意になつた。俺れの一舉一動は滿天下の注目する所となつて居る、俺れ一人の出やうに依りて政界は如何やうにも變動する、俺れは一方には内務大臣の要職に在る、他方には民政黨唯一の大黒柱である。黨員等は俺れの行く所へ着いて來るに相違ない。斯く考へるのも無理はなく、恐らくは此時こそ氏の長き政治生活中、最も得意の絶頂に立つた時であらう。焉ぞ知らん運命の悪魔は、既に口を開いて落ち來る屍を待設けて居る、氏の脚は一步々々と千尋の谷底に向つて近づきつゝあつた。

大演習が了つて氏が二十一日歸京するや、二三の郎黨は大坂京都邊まで出掛けて車中にて歸京後の謀議を凝らした。其日は定例閣議の日に當り、閣僚は午前の會議を午後延ばして安達内相の出席を待つて居るから、内相たる者は東京驛より首相官邸に直行せねばならぬ筈であるに拘らず、内閣會議は打棄て、直ちに内相官邸に赴き、一族郎黨を集めて協力内閣陰謀の相談を爲し、多數閣僚をして空しく時間を費さしむるに至つては實に怪しからぬ振舞である。夜に入りてから一寸會議に顔を出したが、同僚に對しても協力内閣の事は臆にも出さない、而して家に歸ると再び郎黨を集めて密議を凝らし、翌朝の新聞にて公然協力内閣主張の聲明を爲すに至つた。此の徑路を見るだけでも、陰謀政治家の爲す所實に嘔吐を催すの感がある。

協力内閣問題は段々擴張して政界は動搖を始め、之に伴うて經濟界も不安の狀態に陥り、弗買財閥は愈々窮境に陥り、若槻内閣を倒壊して政友會内閣を起し、金輸出再禁止を斷行するに非ざれば財閥に助からない。安達一派が益々拍車を掛け出したのは已むを得ないが、事此に至りては政府も之を黙過することが出来ぬ。政治家として若槻首相の短所は、大事に臨みて、快刀亂麻を斷つ決心と勇氣に缺けて居ると言はれて居るが、併し苟も大命を奉じて國政變理の大任に膺る一國の首相たるものが、然も此の重大なる時局に直面して、關係中より異端者を出して之を統御することが出来ず、政界を不安に陥れて之を一掃するの途を執らざるが如きは、上御一人に對し奉りて輔弼の責を盡くし、下國民の期待に副ふ所以でない、進むならば進むべし、退くならば退くべし、退くには自ら

其の途がある。言ふまでもなく政黨内閣は、議會に於て進退を決すべく議會以外に於ける陰謀に依りて進退するが如きは、政黨内閣を否認する非立憲の甚しきものである。殊に時局が重大であればあるだけ、益々内閣の威信を發揮して、政黨に對する國民の信頼を鞏固にせねばならぬに拘はらず、名を時局に藉りて十年以來確立せる政黨内閣を破壊し、不合理千萬なる變態内閣を造り、是に依りて時局を收拾せんとするが如きは誤りの大なるものである。

加之當時政界及び黨界の實情に照すも、政民兩黨の聯合内閣の出来る可能性は絶対に認められない、多數黨たる民政黨内閣が内閣を投げ出し黨を擧げて少數黨たる政友會内閣に隸屬するが如きは、黨員の承服せざる所であることは勿論、若し犬養氏に大命降下すれば、彼は必ずや政友

に就て、反對黨と通謀して之を裏切る約束を取結ぶに至りては、全く黨を賣る所の叛逆行爲である。然も此事が内閣の要職に在る内務大臣との共同動作たるに至りては、此儘に放任することの出来る譯のものでない。是に於て若槻首相は此の問題を根本的に解決すべく、直ちに閣僚を召集して忌憚なき意見を求められたが、閣僚は固より首相の方針に従ひ、協力内閣なぞに耳を藉す者は無い、唯だ一人安達内相は初めて閣僚の前で協力内閣を主張したけれども、誰一人賛成する者は無い。仍て首相は内相に對して切々として協力内閣論の不可なることを説くと同時に、斷然從來の主張を抛棄すべく、若しそれがイヤならば直ちに辭表を提出すべく勸告せられた。此の場合若し安達氏が恥を知り、責任の一端でも解する明るき政治家であるならば、首相の勸告を待つまでもなく、自ら進ん

で辭表を提出すべき筈であるが、胸に一物を藏せる彼の陰險なる政治家には、左様な男らしき眞似は出来ない。左りとて多數の閣僚と言論の大刀打をすることも出来ず、其場を外すが爲めに、一應考へた上にて後刻返事すると言ひ残して自宅に歸りたるは、實に卑怯千萬なる振舞である。そのみでは無い、氏は一二時間の後には必ず來るべしと約束して歸つたから、閣僚は之を信じて、氏の再來を待設けて居たるに拘はらず、時が過ぎて出て來ない、電話を掛け、使者を走らせると、今夜は疲れて居るから行かぬと言つて、其實宅では郎黨を集めて謀議を凝らして居る、何たるイヤらしき人物であるか。我々は之を聞くさへも胸が悪くなる。翌朝の新聞は協力内閣から急轉して内閣總辭職を書出した、黨員等は之を見て驚くと共に安達氏の行動を怒らざる者なく、彼等の多數は氏の

會一黨の單獨内閣を造ることは、彼の性格に照して疑ふの餘地は無い。安達氏と雖も此位の事が解らない筈はないが、知りつゝ彼れが如き行動を爲すには、他に隠れたる目的のあることは後に述ぶる通りである。

要するに此の場合には現狀を以て進むより外に途は無い、政府及び與黨は一致結束して議會に臨み、衆議院に於ては假令反對黨が亂暴を働いて議事の妨害を爲すも、結局政府の政策は通過すべし、若し貴族院に於て行詰るが如きことあらば其時に臨んで進退を考ふべし、乃ち國民の與望が時の政府を離れたりと見れば潔く辭職すべく、然らずと見れば斷然衆議院を解散して國論に懇ふべし、今日政黨内閣として行くべき途は是より外は絶對に見出すことは出来ない。若槻首相は漸く茲に決意して之を與黨の議員總會に聲明し、以て進むべき方針を明かにした。若槻首相は

右の如き方針を確立して、萬難を排して進むべく決意せるに拘らず、閣僚の一人たる安達内相及び其の一派は、勝手に協力内閣運動を繼續するから、政界の不安は依然として熄まない、其中に愈々總決算を爲すべき時機が到來した。

五 若槻内閣辭職の真相

時は十二月十日、幹部の一人たる某氏は、反對黨の幹事長との間に取換はしたる協力内閣の申合を携へて若槻首相を訪問し、其の實現を勸告した。是は固より安達氏と共同して企てたる策動であるが、凡そ是程黨規を紊亂する不都合千萬なる事は無い。苟も黨員たる者が、總裁の諒解を得ざるのみならず、却て總裁が全然反對の決意を表明せられたる問題

に就て、反對黨と通謀して之を裏切る約束を取結ぶに至りては、全く黨を賣る所の叛逆行爲である。然も此事が内閣の要職に在る内務大臣との共同動作たるに至りては、此儘に放任することの出来る譯のものではない。是に於て若槻首相は此の問題を根本的に解決すべく、直ちに閣僚を召集して忌憚なき意見を求められたが、閣僚は固より首相の方針に従ひ、協力内閣なぞに耳を藉す者は無い、唯だ一人安達内相は初めて閣僚の前で協力内閣を主張したけれども、誰一人賛成する者は無い。仍て首相は内相に對して切々として協力内閣論の不可なることを説くと同時に、斷然從來の主張を抛棄すべく、若しそれがイヤならば直ちに辭表を提出すべく勸告せられた。此の場合若し安達氏が恥を知り、責任の一端でも解する明るき政治家であるならば、首相の勸告を待つまでもなく、自ら進ん

て辭表を提出すべき筈であるが、胸に一物を藏せる彼の陰險なる政治家には、左様な男らしき眞似は出来ない。左りとて多數の閣僚と言論の大刀打をすることも出来ず、其場を外すが爲めに、一應考へた上にて後刻返事すると言ひ残して自宅に歸りたるは、實に卑怯千萬なる振舞である。それのみではない、氏は一二時間の後には必ず來るべしと約束して歸つたから、閣僚は之を信じて、氏の再來を待設けて居たるに拘はらず、時が過ぎても出て來ない、電話を掛け、使者を走らせると、今夜は疲れて居るから行かぬと言うて、其實宅では郎黨を集めて謀議を凝らして居る、何たるイヤらしき人物であるか。我々は之を聞くさへも胸が悪くなる。翌朝の新聞は協力内閣から急轉して内閣總辭職を書出した、黨員等は之を見て驚くと共に安達氏の行動を怒らざる者なく、彼等の多數は氏の

門を叩いて單獨辭職を迫り、二三の閣僚も亦態々氏を訪問して之を勸告したけれども、氏は頑として之に應じない。斯の如き場合に當りて内閣は如何なる方法を執るべきものであるが、歐米立憲國には斯くの如き恥知らずの政治家が現はれたことは無いから、先例の見るべきものが無い。我國に於ては純理より云へば方法は無いではないが、從來の慣例に依れば、此の如き場合には内閣不統一の理由を以て總辭職を爲すことに極つて居るから、他の途を執ることは許されない。是に於て若槻首相は閣僚全部の辭表を携へて參内し、之を、至尊の御前に捧呈した。斯くの如くにして若槻内閣は、陰險なる安達内相の抱合心中に依りて終焉を告げたのである。

六 犬養内閣成立と安達氏の脱黨

翌日政友會の犬養總裁に大命降下し、豫想の如く協力内閣論は一蹴せられ、政友會一黨の單獨内閣が成立した。同時に民政黨員は擧つて安達氏の除名を迫つた、除名は當然である、此の形勢を看て取つた氏はいやながら脱黨届を提出した。大正二年故桂公が立憲同志會を創設せらるゝに際し、當時〇〇村とまで見下げられた中央俱樂部より入り來つて黨員となり、憲政會より民政黨に移り、前後二十年の黨籍を離れねばならぬことになつたのは、彼に取つて如何にも残念であらうが仕方がない。一つには自己の力を過信し、又一つには周囲の者等に誤られたる不明の來たす所であつて、誰れを咎むることも出來ぬ、併し未練は何つまでも

残ることは後に述ぶる通りである。

七 協力内閣論批評

此に至つて私は協力内閣論に就て、忌憚なき批評を加へて見たい、一體安達氏の協力内閣論は、眞に國を憂ふるの至誠より出でたるものであるか、先づ之が疑の種である。郎黨の中には氏を以て眞に國士なりと命名し、協力内閣論は氏が衷心より國を愛し、黨を愛するの熱情より出でたるものであつて、露程の私心や野心を混入せるものでないと大に辯明に努めて居る者もあるが、世間一般は斯くの如き辯明を聽いて、何となく滑稽に感じて居るやうに見える。併し人間の心の中は神様でなければ解らぬから、斯くの如き精神問題は姑く別として、氏は果して協力内閣

が出来ると思つて居たであらうか。三十餘年の間、政界の苦勞を嘗めて政黨や政治家の心理状態は、手に取る如くに見透えて居るべき筈の人が當時の政界に協力内閣が出来ると思つたならば、それこそ考違ひの甚しきものである。氏が夢想する協力内閣の道行は如何なるものであつたかと云ふに、先づ若槻内閣は總辭職を爲して、之に代りて犬養内閣が起り、其の内閣に民政黨は閣僚を送りて協力するといふのであるが、前に述べたる如く、犬養氏は常に安達氏をば陰謀家と看做し、黨の事務長以上の人間ではないと罵倒して、眞の政治家を以て取扱つて居らない。殊に犬養氏の性格は、徹頭徹尾他黨と聯合するが如き不徹底なる事を許さない。然るに其の性格の持主と提携して協力内閣を造り、然も其の内閣に自分が依然として内務大臣の地位を占むることが出来ると思ふが如きは、餘

りに錯覺が大きい過ぎるではないか。故に此點より考察すれば、安達氏は當初より眞に實現の可能を期して協力内閣論を唱へ出したものとは思へない。又例令氏が如何なる考を懷いて居つたにせよ、協力内閣を造るには先づ以て若槻内閣が任意總辭職をせねばならぬ、是が先決問題である。然るに肝腎の若槻首相を始め、閣僚一同は協力内閣に反對して、辭職するが如き考は毛頭懷いて居らない。然らば協力内閣は既に第一歩に於て挫折して居る、實現すべき筈がない。尤も安達氏及び其の一派の人々は、此事に就て今日に於ても尙ほ有ゆる機會を捉へて、若槻氏との經緯を繰返して愚痴を並べて居るやうであるが、左様な事は三文の價値も無い。言ふだけ野暮である。協力内閣論の起りに就ては、若槻安達兩氏の間に如何なる話が交へられたとするも、それは全然問題とはならない。最後

に於て、内閣の首班であり、民政黨の總裁である若槻氏が斷乎として協力内閣を排し、既定の方針を以て進むべしと號令を下したる以上は、安達氏は閣僚としても黨員としても、此の號令に絶對に服従せねばならぬ。若し之に服従することがイヤならば、辭職と脱黨との二つを合せて同時に決行するより外に執るべき途は無い。然るに内閣機構の根本に關して閣僚として他の閣僚全部と意見を異にするも、自ら進んで辭職するの舉に出でず、同僚及び黨員等が之を強要するも尙ほ頑として應ずるの色なく、政治家としても國務大臣としても最も恥づべき抱合心中を以て、多數の内閣を内より崩壊せしむるに至りては、責任政治家としても、政黨政治家としても、將來世に立つ資格は全然零である。協力内閣運動の隠れたる目的は何であつたか、曰く若槻内閣の倒壊で

ある、若槻内閣倒壊が協力内閣運動唯一の目的であつたことは、恐らく安達氏本人より知る者は無かつたであらう。若槻内閣を倒して何の役に立つか、若槻内閣が倒れれば、若槻氏は責任を負うて民政黨の總裁を辭するに相違ない、後の總裁は何人であるか、黨内には種々の意見もあらうが結局は我輩の物である、然るに逡巡躊躇して時日を経過すれば、黨内には井上氏の勢力が急速度に發展するのみならず、一部には宇垣派も擡頭せんとして居るから、總裁問題は何れの方角に飛去るか分らない、濱口氏遭難以來寸時も胸を離れざる總裁問題である。黨中に黨を造らしめて幣原臨時首相代理を打ち、井上藏相を叩き、口を極めて外交財政を攻撃せしめたる直接間接、表面裏面の一齊射撃は、總裁問題を離れては全然無意味である。協力内閣論は、此の目的を達するに世間を欺く好箇

の題目である。犬養内閣の下に内務大臣の位置を占むるも可也、民政黨の總裁となりて次の内閣を狙ふも可也、兎に角若槻内閣さへ倒壊すれば、兩者の中孰れか其の一は我輩の頭上に落ち來ることは疑ない、要は若槻内閣を倒すに在る、是に於て抱合心中が始めて有意義となる。斯くの如き陰險なる目的と手段を以て若槻内閣を倒すことは倒したが倒した後はどうなつたか。犬養内閣は出來たが内務大臣の椅子は舞ひ込まない。若槻氏は總裁の地位を捨てるどころか、黨員一致の信任決議に依りて長く其の地位に留まり、益々勇氣を鼓舞して黨の爲めに奮闘努力せらるゝことゝなつた。唯だ獨り安達氏のみは千尋の谷底に蹴落されて、終生治す能はざる重傷を負ふに至りては、今更ながら神明の恐ろしさを感ぜざるを得ない。

濱口首相遭難以來安達氏が總裁の地位を狙いしことは、氏に取つては一生の不覺である。大政黨の總裁となるには自ら天稟の資格がある、氏は決して其の器ではない。尤も人間には己惚の無い者はないから、氏自身は何と考へて居るか知らないが、世間一般は氏を以て大政黨の總裁となり、進んで一國の總理大臣となりて、國家の重に任じ、内外の經綸を行ふに足るべき大政治家とは認めないから仕方がない。併し天は時ありて人間を弄ぶことがある、安達氏と雖も、出方に依りては或は總裁になれたかも知れない。既に過去つた後であるから今更言ふも及ばぬ事であるが、嚮に述べたる若槻内閣の運命を決すべき十月十日の閣議に於いて氏は何故に次の如き態度に出てなかつたであらうか。曰く我輩は今日内外の形勢に照し、現状を以て押通すことは不可能なりと信ずるから、協

力内閣を提唱する者である、是は我輩が國家を憂ふる一念より出でたる主張であるから、之を枉げる譯には行かない、併し閣僚諸君に於て我輩と意見を異にし、現状を以て進むことが出来ると思ふならばやつて見られよ、我輩は諸君のお伴をすることは出来ないから、御免を蒙りて暫く閑地に静養せん。斯く言ひ放つて潔く辭表を提出して退出すれば、其の主張の是非は別とするも、政治家としての進退は極めて公明にして堂々たるものであるから、氏の眞價は百倍し、後日若槻内閣瓦解の曉には、民政黨總裁の榮冠は或は氏の頭上に落ち來つたかも知計られない。然るに事此に出でずして、自己の主張を撤回せず、單獨辭職を爲さず、女々しく抱合心中を爲すに至りては、此時既に政治家としての生命は葬り去られたのである。立憲同志會創立以來二十年、終始一貫氏と行動を共にし

來れる有力なる某氏は、氏の行動を辯護せんが爲めに、終日終夜書齋に立籠りて理窟を考へて見たが、どうしても理窟が出て來ない、遂に意を決して氏と政治的に袂を分つたと言はれて居る。世の政治家たる者は其の出處進退に就て深く戒むべきである。

八 安達復黨運動の經過と結果

民政黨を去りたる後の安達氏の態度はどうであるか、彼丈げの叛逆行爲を爲し、除名せられんとして脱黨したのであるから、最早復黨なぞは斷念すべき筈であるが、執念深い氏の性格は、之を思切ることが出來ないのみならず、早くも脱黨當日から復黨運動に取掛りたることは争ふべからざる事實である。尤も何事に就ても用心深く、且つ老獪であるから、

間違つても尻尾を攫まらないやうに、復黨の意思なぞは胸底深く藏して世間に露はさない。曰く我輩は大處高處に立ちて政界を靜觀する、八聖殿とやらを造りて大哲學者大宗教育家となる、復黨なぞは夢にも考へたことがない、曰く何、曰く何と日々の報道維れ努めて居るが、焉ぞ知らん黨内の安達殘黨は既に復黨運動を始め出した、それであるから世間が善く言はない。衷心より復黨を望むならば、男らしく若槻總裁の門でも叩いて、奇麗サツパリと過去の心得違ひを陳謝し、將來を誓約して哀訴嘆願するがよいではないか。然るに事此に出でずして、陽に知らぬ顔をしなが陰に小策を弄す、黨員等が憤慨するのも無理はない。果然黨内には復黨反對の空氣が起り、近畿代議士會は率先して、満場一致復黨反對の決議を爲して之を幹部に迫り、幹部も之に應じて復黨問題は之を論議

せずとの申合を爲し、是に依て安達氏の復黨は永久に絶望となつた。

犬養内閣は一月二十一日衆議院を解散し、二月二十日總選舉が行はれることになつた、黨員に恩を賣りて他日の計を做すは此時である、安達氏は斯様に考へたものと見えて、御親切にも百名内外の民政黨候補者に向つて多大の選舉運動費を補助した、其額は少くも七八十萬圓を下るまいと言はれて居る。世の中には實に不思議な事が起る、氏は常々清貧を以て自ら稱して居る、其人の懐から一時に斯くの如き巨額の黄金が轉げ出すに至りては、氏の怪腕は全く奇術師天勝以上である。そのみでは無い、其後に於ても續々として此手で金が出るさうであるが、一體其金は何所から掘り出して、何所に蓄へてあるのか分らない。昨年十二月氏の力に依りて若槻内閣が倒れるや否や、直ちに意外なる噂が起つた、「安

達さんは三井から千萬圓金を貰つたさうだ」此の噂は電の如く一時に全國津々浦々に至るまで響き渡つた。湯屋でも、床屋でも、電車の中でも凡そ人間の集る所には此聲を聞かないことはない、若槻内閣が倒れて犬養内閣が起り、即日金の輸出禁止を斷行したのが爲めに、弗買財閥が一時に何億萬圓かの儲けをしたと言はれて居る。此れと彼れとを照し合せて斯くの如き噂が起つたものではあるまいか、天に口なし人をして言はしむ、噂程恐ろしきものは無い。

總選舉の結果は民政黨が大敗を招いた、之を良い口實として安達一派は再び復黨運動を始め出した。曰く此の惨敗は何んだ、畢竟するに總裁や幹部が役に立たぬ、無能であるから招いたのだ、此儘にして置けば民政黨は凋落して終には亡びてしまふ、宜しく天下に向つて人材を收容し

て陣容を立て直すべし。是が彼等の言分であるが、馬鹿もよい加減にするが宜しい、民政黨は人材があれば之を歓迎するが、今日天下何れの所に人材があるか。君等は君等の親分を人材なりと言ふであらうが、我等は之を人材と看做さないから、斯様な人材は民政黨には禁物である。又民政黨が負けたのは野黨であるからである、日本の選挙は、與黨が勝つて野黨が負けるに極つて居る。政友會も野黨時代には負けたも負けたも大負けをした、大隈内閣の選挙では、二百數十名の議員が一舉に百六名に蹴落されたこともある。勝敗は時の運、勝つて誇るべからず、負けて悲しむべからず、勝ちたる者は兜の緒を締め、負けたる者は捲土重来を期する所に政争の眞味がある。一度負けて腰を抜かすやうな弱虫ならば、初めから政黨人とならぬがよい。

親分も執念深い乾兒等も執念深い、彼等は男らしく脱黨することもせず、黨内に在りながら日夕親分の復黨運動に狂奔する、誠に見下げ果てたる振舞である。何所から金を取出すか知らないが、連日連夜同輩を集め、甘言を以て復黨連判帳に署名を求め、黨中に黨を造りて一歩々々と外道に向つて進みつゝある。如何に口實を設けて隠し立をするも、陋劣なる陰謀は露はれずには居られない。良心に咎められて本部へ顔出しすることも出来ず、別に政治研究會とかいふものを造りて世間を誤魔化さんとする。此に至りて幹部も黙する能はず、數名の首魁に對して、黨規に依り斷然除名すべきなれども、武士の情を以て脱黨の恩典を與へたるは、民政黨のお慈悲なりとは云へ、黨員の中には幹部の處置手緩しと憤慨する者もあつた。

復黨運動陰謀組の首魁と目せらるゝ數名の者が除名的脱黨處分に付せられて、復黨を許さざる本部の態度が明かになつた以上は、是まで裏面に隠れて知らぬ顔をしながら糸を引いて居た親分は、最早復黨を斷念せねばならぬ。復黨の望みが絶対に容れられないと極つた以上は、是からは黨員を切崩して、少數ながらも仲間を集めて政界の足場を造らねばならぬ。引抜かれる者は何人であるかは、選舉の時に運動費を出してやつた閻魔帳に明記せられてあるから、之を目當に一々膝元へ呼寄せて脱黨を勧告する、勧告と云ふよりも寧ろ脅迫である。選舉の時に彼れだけ援けられて進退まで約束して置きながら、今更躊躇するとは何事であるかと迫られる、憫むべきは此の連中である。脱黨すれば選舉區から見棄てられ、脱黨せざれば脅迫せらるゝ、進退谷まつた末、今度は却て親分に逆

撥を喰はして、選舉區の諒解を得ざれば脱黨は出来ぬ、諒解を得るには金が要るといふので再び過分の運動費を引出し、之を懐にして選舉區へ歸り、少數の有志を集めて酒宴を開き、民政黨の悪口や政界の事情なぞ、嘘八百を並べ立て田舎者を瞞着し、其上幾何かの小遣錢を握らせて脱黨承認の形を作り、然る後愈々脱黨届を差出すと同時に、愚にも付かぬ脱黨の宣言を發表する、之が彼等の道行であるから、其の醜劣なることは迎も鼻持になつたものでない、或人が此の有様を見て次の句を吐いた。
買はれ行くらしろ姿や秋の風

九 親分乾兒論

我國の政界には親分乾兒といふものがあり、其の關係は博徒や掬摸の

仲間の親分乾兒と同じものである。博徒の親分は繩張を作り、テラ錢と
かいふものを捲上げて乾兒を養ふ、拘摸の親分は人の懐から金を奪ひ取
りて乾兒を養ふ。而して乾兒等は親分の爲めに身を擲つて働かさうて
あるが、是と同じく政界の親分は賄賂を取り、利権を漁り、財閥と結托
し、其他世の中に曝け出すことの出来ない有りと有ゆる不正手段を以て
不淨の金を集めて乾兒を養ひ、党内に於て自己の惡勢力を張つて居る。
而して親分が乾兒を養ふのは、全く己れの野望を遂げんが爲めであるか
ら、必要の時來らば、乾兒の生命を奪ひ取る位のことは何とも思はない
随分残酷なる事ではないか。時々生活費や選挙費を補助したからとて、
政治家の生命とも謂ふべき節操を捨て、まで、己れの供をせよと迫るが
如きは、血の通ふ人間の言へることではない。又乾兒も意氣地が無い、

例令物質上の援助を受けたからとて、己れの一身を擧げて親分に献上す
るが如きは餘りにも弱過ぎるではないか。言ふまでもなく代議士の一身
は己れの物の如くにして實は然らず、彼等の背後には數萬の選挙人が控
へて居る。選挙の時には民政黨の候補者として立ち、民政黨の主義政策
を強調し、選挙人も亦彼れは民政黨員なるが故に投票して彼れを中央議
會に送つたのである。然るにその選挙人の諒解を得ずして勝手に黨籍を
捨て、しまう、選挙人を裏切り、國民を欺くの罪は斷じて容すことが出
來ぬ。黄金の爲めに節を賣る、是れ獨立人に非ずして奴隸である。醜業
婦と何の擇ぶ所がある。政治家は決して親分を持つべからず、黨人とし
ては政黨それ自身が親分であらねばならぬ。故に苟も政黨に向つて叛逆
する者は、如何なる先輩たりとも蹶然として手を分つべく、此の決心な

き者は黨員として立つべき資格は無い。

一〇 國民同盟の解消

以上の如き徑路に依つて、二十餘名の代議士が民政黨を脱し、他の數名の代議士を合せて其數三十餘名に及び、是れて先づ院内の交渉團體たる資格が付いたと欣んで居る。而して其の團體の名稱を「國民同盟」と呼ぶが、國民同盟とは僭上の至り、「國民非同盟」と呼ぶこそ適當である。こんな不潔なる團體に眞面目なる國民が同盟加入する氣遣はない。而して此の團體は天下に向つて何を宣傳して居るかといふと、第一政界の淨化である、既成政黨は腐敗して居るから、新政黨を造つて政界を革新するのであると言ふ、馬鹿を言ふべきものではないぞ。安達親分を既

成政黨たる民政黨に復歸せしむるが爲めに、有りと有らゆる陰謀を運らしながら、それが許されないと極まると今度は既成政黨の悪口を叩き出す、既成政黨が悪むといふならば何故に復黨運動をしたか。店に火を放けて逃出した者を復歸せしむるが如き運動が、功を奏すると思ふ者ほど常諺外れの頓馬は無い、それが聞届けられなかつたから、店の悪口を叩くとは恩知らずである。其上選舉の時にも、脱黨の時にも、不淨の金を貰つて變節した腐腸漢が政界革新とは何事である。政界革新とは彼等の如き醜漢をば徹底的に政界から驅逐する、是が政界革新の第一歩であつて、民政黨は此の目的を有して居るから、彼等の復黨を絶対に許さないのである。

國民同盟でも一人前の政黨の如くに思つて居るかも知れない、従つて

宣言や綱領を起草して居るさうである。一に曰く「日本建國の精神を擴充す」と、日本建國の精神は神の精神である、彼等如き不淨の金に汚されたる身を以て神の精神を擴充するなどは神徳を瀆すものである。二に曰く「汎く天下に訴へて同志を糾合し正義廉恥の交を鞏くす」云々、「正義廉恥」は「不義破廉恥」と訂正すべきである。三に曰く「國際正義の再建を期す」彼の徒に國際正義などを云爲する資格は無い。四に曰く「統制經濟を確立し」云々、こんな直譯文字が何の意味を爲すか。五に曰く「大衆生活の保障を期す」、正當の職業なくして政治界をごろつき、所方々に無心を言うて自ら生活して居る連中が大衆生活を保障するとは、是程滑稽な事は無い、他人の生活を保障する前に、先づ以て自分の生活を如何にして保障するかを考へよ。要するに彼等の爲す所の不眞面

目なること斯くの如し、こんな連中が何を唱へたからとて天下一人として之を信ずる者があるか、人にして信なくんば千言萬語も沙上の偶語である、須らく自ら省みて恥を知るべしである。

親分の安達氏も、最早政治界から足を洗ふべき時である、〇〇村とまで言はれて、殆ど政治界に齒せられざる當時の中央俱樂部から桂公の立憲同志會に入り、憲政會、民政黨を経て此間丁度二十年、犬養氏の言を藉るではないが、別に學問も無ければ經綸も無く、左りとて演説が出来るではなく、唯だ々々政黨の世話役を職業として、熱心に事務員の仕事を續けて來た功勞に依りて、黨に在りては大幹部と目せられ、出でて二回までも國務大臣の椅子を占め、從三位勳一等を頂戴して殿上人となるを得たること、思へば身分不相應の榮達である。周圍の者等に誤られた

とは云へ、柄になき野心を懐きたるが爲め、黨よりは放逐せられ、政友よりは絶縁せられて、二十や三十の仲間を集めて、是から再び政界に乗出さうとした所で、所謂日暮れて道遠し、逆も漕付くべき鳥は無。七十歳の老體を提げて東奔西走、最も不得意なる演壇に立ち、最も陳き頭を持つて、新聞記者上りの新し屋が認めた原稿の朗讀演説をやるなぞは、悲劇中の悲劇、喜劇中の喜劇ではないか。

近頃氏の口から政界革新の聲を聞いたと言うて呆れて居る者がある。嘗て内務大臣の椅子に在りては持前の術策を弄して地方官を使噓し、陰險な選舉干渉をして選舉界を腐らして置きながら、今更政界革新とは餘り人を馬鹿にして居ると憤慨するのも無理はない。何つぞや關西に出張し、大阪にて押賣的に人を集めて講演をしたが、ガラにもない思想問題

や統制經濟なぞを口にしたる爲めに、來會者の一人より質問を受けて答辯に窮し、彼の冷かなる顔が眞赤になつたのを見て、質問者も氣の毒に堪へずして、二の矢を放つことを思止つたといふことである。こんな痛い目に會ひ、恥を搔いてまでも政治運動を続けなければならぬとは何の因果であらうか。此上政治運動を続けることは本人の爲めにならないばかりでなく、氏のお伴をして民政黨を脱したる二三十人の乾兒を、生きながら政治界より葬り去るものである。彼の連中は金や行掛りて脱黨したものの、脱黨するまでには随分心を傷めたに相違ない。民政黨を離れるのは親に別れる程辛い、左りとて痛手を押へられて逃げる途が無く如何に煩悶したかは想うても哀れである。由來老獪なる政治家が、己れの野心の爲めに未熟なる後輩を餌と做し、時あつて變節を勧誘する有様

は、丁度宿引が旅人を勧誘すると同じく、草鞋を脱がせるまでは手取り、足取り、色々な世話を焼いて旨いことを言ふが、一たび草鞋を脱がせ座敷まで引上げると、後は山出しの女中に委して一向に顧みない、腹を立てた所で後の祭、宿料を拂つて勝手にしろで済んでしまふ。脱黨連中も旨いことを聞かされて、夢のやうな空想を描きながら脱黨したもの、今日になつて見れば貰つた金は無くなる、選挙區より見放され、次の選挙に望みは無い、變節の汚名を齎しながら政治生活の終焉を告げるのである。早くも之に氣付いた連中は、夢が醒めると共に過去の輕舉妄動を悔ひ、我身の將來を考へて復黨を熱望して居る者もあるが、親分の綱に引かれて離れんと欲して離るゝ能はず、四苦八苦の間に其日を送つて居ることは偽りなき近時の状態である。

故犬養木堂の末路を見よ、氏の政治生活四十年、改進黨より進歩黨、國民黨を経て、最後の革新俱樂部に至りては、三十餘名の代議士を擁して随分惡戰苦闘を續けた。而して政界の革新、既成政黨の打破が其の大なる旗印であつた。曰く既成政黨は腐つて居る、殊に其の中で政友會が最も腐つて居る、政友會を滅ぼすに非ざれば日本に立憲政治を行ふことが出来ない、斯くの如き空言を叫びつゝ、心から人を欺く考であつたか否やは別として、何か前途に光明を眺めつゝあるものゝ如くに、十年二十年同志を率ゐて來たが、終には行詰つて堪へ切れなくなつた末には、とう／＼既成政黨中の既成政黨たる政友會、然も之を滅ぼすに非ざれば日本に立憲政治は行はれずとまで攻撃した其の政友會に、一族郎黨を提げて、名は合同と稱するも其實は降服したてはないか、政界革新論者の

末路は斯くの如きものである。彼の精悍にして我慢強く、瘠せても枯れ
ても政界一方の旗頭であつた犬養氏ですら此位の事しか出来ない、況や
犬養氏の片腕にも足りない安達氏の如き者が、然も七十歳の老體を抱へ
ながら、二十や三十の仲間を引連れて政界に野心を行はんとするが如き
は、飛んでもない間違であつて、落付く先きは野垂死より外に無い。そ
れでも乾兒等を手離さぬが爲めに、今に政友會が分裂する、今に民政黨
が崩壊する、今に齋藤内閣が倒れて我々の天下になるなぞと、瘋癲病院
患者の寢言のやうなことを言ひ觸らしつゝ、哀れなる郎黨を引張つて行く
のは、是程罪な事はない。民政黨の大幹部であり、民政黨内閣の内務大
臣であつた時代には、財閥から或物を引出すことが出来たかも知れぬが
今となつては最早對手にする者も無い。まさかの時の用意に蓄へた物も

追々と減じて、秋風落寞懷中寒しの感なき能はず。今の中に思切つて政
界を隠退すると同時に乾兒等を解放すれば、乾兒等も思ひくに行きた
い所へ行くことが出来る、民政黨に復りたくば、前非を悔ひて復黨を求
むれば、甚しき悪質の者に非ざる限は復黨を許さるゝであらう。民政黨
がイヤならば政友會へ行くも可し、何れにするも二大政黨を離れて、他
に一夜造りの政黨を拵へんとするが如きは考違ひの甚しきもので、左様
なものが永續した例は無い。新聞記者を手懐けてどんな廣告をさした所
で賈物が賣れる譯はない、仲間の者等が躍起となつて何んな宣傳するも
世人は本氣で對手にせず、軍閥を利用せんとして軍閥に一蹴せられ、財
閥に取縫らんとして財閥に見放され、今や八方塞りの暗道に立ち、哀れ
煩惱の犬に追はれて畜生道に彷徨するよりも、心機一轉、大悟徹底して

政界を後ろに八聖殿のお守りでもして餘生を送ることが、過去の罪業を滅ぼすせめてもの功德であると思ひ、善意を以て政界隱退を勸告するものである。

國民同盟の正體斯くの如し、之を要するに國民同盟なるものは、安達氏が民政黨總裁の地位を狙うて失敗したる其の失敗の塊りであつて、其他の何物でもない、之を意義ある政治團體と見る者は見る者の誤りである。斯くの如き塊りが有らうが無からうが、政界には何の影響も無いが、唯だ昭和七年中に斯くの如き似而非なる政治團體が現はれたことを記す爲めに、一氣呵成に筆を揮ひたることを斯くの如し、庶幾くは讀者之を諒せよ。

昭和七年十二月十八日 印刷
昭和七年十二月廿二日 發行

三十錢

著者 北村庸三

東京市芝區新堀町三十一番地

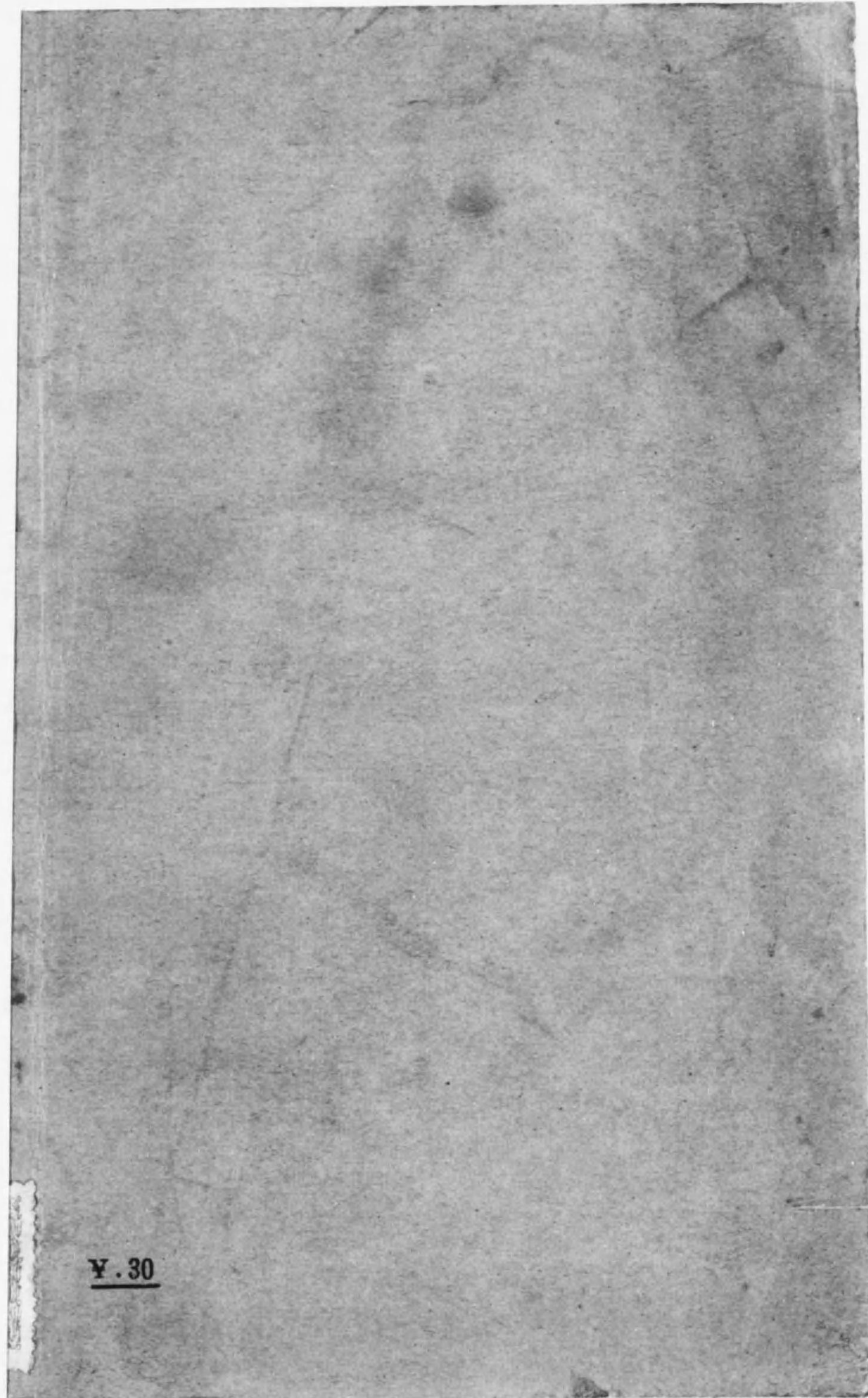
編輯者 田中正義

東京市京橋區木挽町一ノ十二

印刷人 川橋源三郎

印刷所 仁川堂川橋印刷所

終



Y. 30